

Bangladesh独立戦争と戦闘参加者・目撃者の記録 ——解放戦争研究センターの「オーラル・ヒストリー・プロジェクト」

Oral Records of the Participants and Witnesses of the Bangladesh War of Independence:
“Oral History Project” by Bangladesh Muktiyuddha Gabeshna Kendra

佐藤宏 SATO Hiroshi
(本COEアドヴァイザー)

Bangladesh独立戦争は、ビアフラの内戦と時を同じくして、新聞の国際面に読者の目をひきつけた。1971年の出来事であった。今から思うに、人々の関心を呼んだのは、戦争自体の推移はともかく、戦火に追われた難民の数の膨大さと、その生活の悲惨さであったのではないか。旧式の銃を担ぐにわか仕立ての戦士の写真が報道されはしたが、 Bangladeshの人々が、戦争にどのように関わったのかをたち入って伝える記事は少なかった。その後、独立 Bangladeshは、世界の貧困諸国の代表格であるかの位置付けを与えられ続けて30年以上が過ぎた。

この間の30年の Bangladesh政治は、独立戦争の功名争いに明け暮れたといつてよい。アワミ連盟 (Awami League) は、その指導者ムジブル・ラフマン (Mujibur Rahman) に、これに対抗して Bangladesh民族主義党 (Bangladesh Nationalist Party) は、パキスタンに叛旗を翻したジアウル・ラフマン少佐 (当時) (Ziaur Rahman) に、独立戦争指導の栄誉を独占させようとしてきた。政権交代で役所がまず行うのは、掲げた肖像を取り替えることである。かくする間に、独立30年を経て、イスラーム党 (Jamaat-e-Islami) が閣僚を2名も出すというような事態が、2001年10月の総選挙によって現出した。この党は、独立戦争当時、解放戦士 (muktiyoddha) の摘発や虐殺を手懸けた組織である。功名争いの犠牲になったのは、 Bangladesh独立の大義であった。

ベンガル語で書かれた独立戦争に関する参戦記、回想記の数は四、五百点を下るまい。しかし、書かれたものの多くが、国政における功名争いのミニチュア版でないという保障はない。このほかに、みずから書き残されることのない無限ともいべき人々の経験がある。「指導者」と「民衆」の役割を正に評価する歴史記述は、ごく少数の研究者によって細々と続けられてきたといつて過言でないのが、この国における独立戦争研究の実情であった。

このような研究状況の打開をめざす試みとして、ダカにある民間研究機関、 Bangladesh解放戦争研究センター (Bangladesh Muktiyuddha Gabeshna Kendra、以下MJGK) は、1996年と97年にわたり、

全国で約2500名のインタビュー記録を収集した。証言には、学生、ゲリラ兵士、ベンガル人正規兵、国境警備隊（East Pakistan Rifles）隊員、医師、教員、農民、商店主など、幅広い階層にわたる人々の経験が含まれている。センター関係者による地道な活動にも関わらず、このオーラル・ドキュメントは、その一部がダカの出版社から刊行されたのみであり¹、広く公開される便宜に恵まれていなかった。

本「史資料ハブ地域文化研究」プロジェクトでは、2003年度から2005年度の3年間の予定で、録音記録を再生し、年間4冊のインタビュー記録を県単位に編纂する事業に対して協力をおこなってきた。この紹介の時点（2005年1月末）で、予定通り、すでに7冊の刊行が実現している。内訳はボリシャル県1巻、ディナジプル県3巻、クルナ県2巻、チュアダング県1巻である。各巻には平均して50名のインタビューがベンガル語による問答形式で収録されている。MJGKによるこのプロジェクトの概要とその意義について簡潔に紹介を試みたい。

1. プロジェクトの概要

このプロジェクトをすすめているMJGKはダカ大学歴史研究者を中心に1990年4月に組織された。MJGKは、1996年から97年にかけて、全国2,500人（合計1,100時間相当）のインタビューをテープ録音し保存した。編纂済みの記録は2003年4月現在で、450人分であり、すでに紹介したように、2003年度以降、「史資料ハブ地域文化研究」プロジェクトの協力のもとに、2005年度までに、さらに600人分の編纂を予定している（現時点で350名のインタビューが編纂済みである）。

1.1 インタビュー記録の収集と編纂²

(1) 対象地域の選定

インタビューの選定の対象となったのは、全国全ての県（District）³ではない。対象県の多くはインドと国境を接し、活発な解放戦士の活動の見られた地域が中心になっている。現在の県名でいうと、ディナジプル、ナワブゴンジ、チュアダング、クルナ、シレットおよびクミッラのコスバ（カスバ）警察区（タナ）の5箇所がこれにあたる。内陸部では首都を含むダカ県と南部のデルタ地域にあるボリシャル県の2県が選ばれている。これまでに編纂された資料を概観してみても、これだけの対象地域からだけでも、独立戦争の様相の地域的な特徴は十分に浮かびあがってくる。この点はあとで紹介するが、一例を挙げれば、パキスタン正規軍と解放軍の組織的な戦闘までが行われたコスバ地域と、そうした直接の戦闘が殆どみられず、分散的なゲリラ活動に終始したボリシャルでは、抵抗組織のありかたも大きく様相が異なっていた。独立戦争の地域的な多様性、ひいては、人々の抵抗の多様な姿を浮かびあがらせることができるのも、こうしたオーラル・ドキュメントならではの成果であろう。

(2) 記録収集担当グループの組織化

実際のインタビュー収録の手順は以下のようなものである。このプロジェクトでは、各県につ

いて、合計16名のフィールド・ワーカー (FW) を採用し、プロジェクトを運営するS・ビッシュス氏らをくわえ、これらのFWがインタビュアーとなった(編纂されたインタビューにはFWの名が明記される)。FWには、その地に住む、もしくはそこで活動している新聞報道員、教員などを中心に、独立戦争時の事情に通じた人を選定した。FWは、対象地の社会活動家、教員、解放戦士協会(Muktijoddha Samsad)⁴などと協議して対象者を選択する。また、インタビューについては、おおよそその基準となる質問項目はあるが⁵、質問表という形はとらない。書面の形式は全くとらず、すべて対面の質問によってインタビューが行われた。

(3) 対象者の選定

インタビューの対象者は、おおよそ以下4つのグループのいずれかに属している。とくにその内訳などは無く、編纂結果からみると(a)群のインタビューが多くを占めることになっている。また、(d)群については、実際には証言協力者は得られなかった。

- (a) 直接の参加者(旧ベンガル連隊、東パキスタン・ライフル隊、警官、退役軍人、学生、青年、教員その他の解放戦士経験者)
- (b) パキスタン軍の攻撃・暴行の被害者、また逆に協力者
- (c) パキスタン軍の攻撃・暴行の目撃者
- (d) バングラデシュ独立への積極的反対者、パキスタン政府への協力者

対象者の職業、教育レベルなどの構成については、とくに選定の際に配慮していない。上記4群の対象者のうち、結果的に最も多い(a)群についていえば、いわゆるカレッジ(ないし、その入学資格)以上の学歴者が多いことは当然予想される。編纂されたインタビューからみても、こうした人々は概略的な質問に対しても、進んで詳細を語るのに対して、農業労働者や老齢の女性などの場合は、ごく簡単な受け答えて終る傾向がみられる。

(4) 記録の検討と編纂への採用過程

収録されたインタビューは編纂者がチェックする。一地域から多数のインタビューを採るので、記述が重なり、あるいは相反する場合も生じる。通例は既述が重なるが、そうでないものを棄却することはしない。収録の内容を収集者の側で修正することは無論おこなわない。ただし、複数の立会いでインタビューをとる場合、しばしば話の途中で、他の参加者から訂正が入ることもあり、それによって話者が記述を訂正することはみられる。最終的には編纂の段階で、編集者2人が内容を再度チェックする過程が入る⁶。また、FWらによるインタビューの質が悪く編纂の段階で棄却される記録も、約1割程度存在した。

1.2. 記録収集上の問題点⁷

こうして収録、編纂されたインタビュー記録の限界性、あるいは問題点について、最も中心的に編纂の役割を担ったS. ビッシュスは、次のように5点にわたって分析している。

(1) 政治情勢の重要性——つまり、インタビューの時期が、アワミ連盟政権期であったことからヒンドゥー教徒も比較的積極的にインタビューに応じていた。しかし、2001年10月にバングラデシュ民族主義党とイスラーム政党による連合政権が登場してからは、とくにヒンドゥー教徒の発言は慎重になっている。おそらく同じようなインタビューは現在では困難であろう。実際に、2003年にフォローアップ調査を行った経験から、これは切実に感じとれる。

(2) また、当然ながら、インフォーマントは必ずしも質問のすべてについて答えてはいない。特に当時の対パキスタン協力者問題については、彼らが地域の有力者として各級議会の議員などに「復権」している事例が多いため、こうした人物にかかわる情報は、あえて触れない傾向がある。

(3) パキスタン軍などによる女性への暴行は、広範にみられたが、こうした情報については、インフォーマントはおおまかな記述以上に出ることを拒んでいる。

(4) さらに、記憶の薄れ、自己の過大評価など、回想・記憶につきものの限界がみられる。

(5) また、これも当然な事情ではあるが、教育水準や職業、その他の背景から同一事件についての解釈の違いが見られる。当然そうした記録は、食い違いのまま記述される。

2. 独立戦争に関する「オーラル・ヒストリー・プロジェクト」の意義

MJGKによるこのプロジェクトは、独立戦争の研究に、どのような新たな視点や知見を提供することになったのだろうか。最後に、バングラデシュ国内での、これまでの独立戦争研究の流れをふりかえり、プロジェクトの意義を考えてみる。

2.1 バングラデシュ独立に関する歴史研究の史資料

研究書を別として、独立戦争に関する従来の資料は、大別して3種類に分けられよう。第一は、内外政府による公文書等の資料集である。第二は、刊行された回想録の類、そして第三に、本プロジェクトと類似のオーラル・ヒストリーである。

(1) 既刊の資料集、証言等では、なんといってもバングラデシュ政府刊行による15巻の資料集が特筆に価する⁸。この資料集は、単に独立戦争にとどまらずパキスタン独立以降の東パキスタンに関する政治史資料として、各種の基本文書、同時期の報道記事、国際的反応等が収録されている。しかし、独立戦争に関してはわずかの証言が含まれるのみである。インド政府もまた、2巻本からなる基本文書集を刊行している⁹。アメリカ政府の記録としては、すでにキンジャー大統領補佐官による回想録が、独立戦争の国際的な側面に触れているほか、公開された米外交文書史料を編纂したRoedad Khan (1999) などが入手可能である¹⁰。また、敗戦の責任究明をめざしたパキスタン政府による調査委員会 (Hamoodur Rahman Commission) の非公開報告書が、

2000年にダカの日刊紙*Daily Star*によって暴露されたのを機に公開され、さらにパキスタンの民間出版社から刊行された¹¹。

また本プロジェクトの主編集者のS.ビッシャスが、バングラデシュ政府刊行の全15巻資料集に含まれていない、ムジブナガルの臨時政府時代の公文書集を近々刊行する予定である。これらをもってしても独立戦争に関しては、今もお重要な欠落がある。例えばパキスタン軍による軍事行動後、拘束直前の1971年3月26日にムジブル・ラフマンが発したとされる「独立宣言」などは、その有無が確認されていないのである。

(2) 第二に、様々な立場の個人による英文、ベンガル語の記録、回想録、とくに軍の指導層¹²による回想録がある。これらは、MJGKによれば1千点に近いとされるが、これらを網羅した目録や資料室といったものは存在しない。バングラ・アカデミーが1993年に行った独立戦争関連の出版展示会のカタログには、国内出版のみだが326点が収録されている。おおよその目安の過ぎないが、参考までに、米議会図書館の検索では、ベンガル語の「71年」(Ekättara/Ekättarer)を含むもの42点、独立戦争、解放戦士、解放闘争(Muktiyuddha/-yoddhā/-samgrām)などを含むもの34点であった。

(3) 本プロジェクトに先立つ、いわゆる「オーラル・ヒストリー」に属する試みもわずかながら存在する。それらはいずれも1990年代以降、つまりエルシャド軍政の崩壊後の作業であるという特徴がある。もっとも初期のものは、1990年のNational Museumによる約100名を対象とするインタビューで、資金はFord Foundationが提供した。ただし、これは戦争参加者のみでなく、独立期一般についてのインタビューであった。

研究者による本格的な作業は、MJGKに関係するM.マームンらにより1990年代の初期、つまり軍政の終焉した直後の時期から開始された¹³。これらの作業が、1996年からのMJGKによる作業へとつながるのである。マームンはつぎのようにいう。バングラデシュ独立以降、とりわけ1975年のクーデタ以降の軍政下において、独立戦争の記述に関する「軍事(軍人)化」、つまり旧パキスタン軍の少佐クラスを中心とする職業軍人の功績を中心にえがく独立戦争史観が支配的になった(Māmun 1992a: 25-33; 1992b: vii)。オーラル・ヒストリーの手法を、こうした史観への有効な対抗策としてマームンは位置付けている。MJGKのプロジェクトがマームンの関心の延長線上にあることは間違いないだろう。

2.2 MJGKのオーラル・ヒストリー

独立戦争の「軍事化」以上に、MJGK関係者をこのプロジェクトに駆り立てているのは、おそらく戦争そのものの歴史的意義の否定につながる現実政治の動きであったように思われる。1973年の対パキスタン協力者(コラボレーター)裁判の停止、釈放、1975年のクーデタ以降、ジア、エルシャドと二代の軍政(後者はしかも戦争後の「パキスタン帰還派」軍人)のもとで、独立戦争時の反バングラデシュ勢力、あるいはイスラーム勢力が復権を果たした。こうした動きに人々が無関心であったとは考えられない。それゆえに対パキスタン協力者たちの、とりわけ軍政下での復権

を克明に描いた『71年の殺人者と手先たちの消息』（1987年刊行）¹⁴は、1年間で1万部という、この国としては爆発的な売れ行きで読まれた。独立戦争の実像に迫る試みは、その意味で現実政治そのものである。「顕彰」でもなければ「告発」だけでもない本格的な独立戦争の自己検証は、MJGKのこの作業によって、バングラデシュでは、ようやく始まったと見たほうがよいのかもしれない。

このオーラル・ヒストリーでは、末端の住民から解放戦士、さらにバングラデシュの職業軍人・国境警備隊・警官など、職業的な武装勢力へ、そしてインド軍関係者へというように、独立戦争における各層の動きを重層的につかむことができる。そのなかで、パキスタン軍による虐殺の実態（いわゆる Mass graveyard）、解放戦士と民衆の協力と関与が証言される。さらに、抵抗勢力内部の不協和音、とりわけ先立つ1970年の選挙で圧倒的な支持を集めたアワミ連盟による、左翼勢力への警戒心からくる排他的な指導の様子も随所で指摘され、独立後政治の伏線が与えられる。またパ軍占領下の農村の実態、地域レベルでの抵抗の具体像、さらには大量の難民を受け入れたインド領内での必ずしも支持一色とはいえない住民の複雑な反応など、戦争の多彩な様相に関するきわめて豊かな実例が提示される。また、それぞれの巻からは、県の特有な事情からくる独立戦争へのかかわりの地域的な多様性を読みとれる点もきわめて興味深い。例えば、コスパでは他の県ではみられない解放軍の正規部隊による戦闘が紹介されるいっぽうで、パキスタン軍の浸透が弱い内陸のボリシャルでは、2、30名規模の集団による分散的なゲリラ活動が支配的である。ディナジプルの巻では、印パ分離独立時に東パキスタンに避難したムスリム難民（いわゆるビハリー）と解放勢力の角逐が記録の中で重要な位置を占めるというように。

読者はプロジェクトの成果を通じて、あらためてこの戦争が幅広い民衆の支持に支えられた戦争であったことを実感するであろう。予定の編纂事業が完了した時点で、バングラデシュ独立戦争のさらに詳細な検討をおこなう機会をもちたいと思う。

注

- 1 *Aṃśgrahaṅkāri o pratakshyadarśir bibaran muktīyuddhe Kasbā*（参加者と目撃者の記録、解放戦争におけるコスパ）Ḍhākā: Iunibhārsiṭi Pres, 1999；*Aṃśgrahaṅkāri o pratakshyadarśir bibaran muktīyuddhe Bariśāl*（参加者と目撃者の記録、解放戦争におけるボリシャル）、Ḍhākā: Māolā Brādārs, 2003；*Aṃśgrahaṅkāri o pratakshyadarśir bibaran muktīyuddhe Dinājpur*（参加者と目撃者の記録、解放戦争におけるディナジプル）、Ḍhākā: Māolā Brādārs, 2004。1971年の戦争の意義を重視する人々は、MJGKがそうであるように、「独立（independence: svādhīntā）」を使わずに、「解放（liberation: mukti）」を用いる。独立後の憲法でも、liberation が用いられていたが、後に軍政のもとで、この言葉は independence に置き換えられた。このことに十分留意したうえで、本稿では通常の「独立戦争」という言葉を使用する。なお、以下ベンガル語資料の翻字は米議会図書館に準じるが、語末の短母音 a は通例落とした。
- 2 以下は編纂事業の主編集者である S. ビッシャス（Sukumar Biswas）氏提供による資料にもと

づく。

- 3 独立戦争時の県 (District) はその後、下位行政単位の郡 (Subdivision) が県 (Zila) に昇格した。編纂の巻の単位としての「県」は旧県の場合も、新県のばあいもある。
- 4 解放戦士協会は、戦争の記念事業や元戦士の福利厚生を目的として設立された財団。経営の基盤としては接収された旧西パキスタン人の資産、事業体の一部があてられている。
- 5 ほぼ共通な質問項目は、1970年選挙以後の情勢をどうみたか、パキスタン軍の軍事行動の開始を何時どのように知ったか、パキスタン軍の行動、インド領への脱出の状況、解放戦争への参加の様態、家族の被害、周囲のパキスタン協力者の情報、戦争終結後の本人の活動などであり、その他はインフォーマントの反応に応じて一様ではない。
- 6 例えば、現存する人物の当時の行動が実名で語られることもあり (例；コスバの巻での Abdur Rahman Biswas、BNP 政権時の大統領)、事実の確認には慎重さが要求される。これまで一般向けに刊行された3巻 (注の1) については、主編集者S.ピッシュスによれば、内容に関する抗議の事例はない。
- 7 以下も主編集者 Sukumar Biswas 氏提供による資料にもとづく。
- 8 Gaṇatantra Bāmlādeś Sarkār, Tathya Mantranālaya, *Bāmlādeśer svādhīnta yuddha Dalilapatra*, (バングラデシュの独立戦争 記録集) Vol.1-15 (1982-1985).第15巻が、インタビュー編であるが、政治家、行政官、知識人など42名に限られている。今回COE収集資料として所蔵。
- 9 Government of India, Ministry of External Affairs. *Bangladesh Documents*, Vol. I (1971); Vol. II (1972) . New Delhi.
- 10 Khan, Roedad 1999. *The American Papers Secret and Confidential India-Pakistan-Bangladesh Documents 1965-1973*. Karachi: Oxford University Press; Aijazuddin, F.S. 2003. *The White House and Pakistan, Secret Declassified Documents, 1969-1974*. Karachi: Oxford University Press.
- 11 *The Report of the Hamoodur Rahman Commission of Inquiry into the 1971 War, As Declassified by the Government of Pakistan*. Lahore: Vanguard Books. 報告書には依然として非公開部分も残されているともいわれるが真偽は確認できない。
- 12 例えば、Safiullah, K.M. 1995. *Bangladesh at War*. Dhaka: Academic Publisher
- 13 例えば以下の文献。Habib, Harun (ed.) 1991. *Prataksḥyadarśīr cokhe muktiyuddha*, (目撃者の目で見た解放戦争) Ḍhākā: Nāoroj Kitābistan; Rāhman, Atoyār (ed.) 1991. *Āmi muktiyoddhā chilām*, (私は解放戦士だった) Ḍhākā: Nāoroj Kitābistan; Māmun, Muntāsīr (ed.) 1992a. *Bole jete habe muktiyuddher gāthā*, (解放戦争の詩を語ろう) Ḍhākā: Khān Brādārs Eyānda Kompāni ; Māmun, Muntāsīr (ed.) 1992b. *Ekāttarer bijayā gāthā*. (71年の勝利の詩) Ḍhākā: Osmān Gani.
- 14 Muktiyuddha Cetnā Bikāś Kendra 1987. *Ekāttarer ghātaka o dālālarā, ke kothāya*. (71年の殺人者と手先たち、誰がどこに) Ḍhākā: Muktiyuddha Cetnā Bikāś Kendra.